

陽気な客

山本周五郎

青空文庫

——仲井天青が死んだのを知ってるかい。知らないって、あの呑ん兵衛の仲井天青だぜ、きみが知らない筈はずはないんだがなあ。

七日七夜 酒を飲まず

アポロンの奏かなでる琴を聞かず

肉を啖くらわず ニムフを抱かぬ

(天青よおまえの顔は)

おちぶれたバツカスのようだ

この端歌はうたを作ったのはきみじゃなかったかね、おれはそうとば

かり思つてたがね。

——なんだ、こんどはかすとりか、ビール麦酒は一本きりか。ちえつ、わりときみもたいしたことはないんだな周五郎、きみなんぞ景気がいいと思つてたんだが。……平均して月にどのくらいになるかね、五千くらいかね。……ふうん、いや、そうだろうな、そのくらいのもんだろうな。……うん、いいよ飲むよ。

——ところで酔つちまわないうちに話すんだが、十八枚ばかりの短い小説の種はないかね、ライトモチイブの娯楽性のある筋が欲しいんだ、ある雑誌から頼まれたんだが、娯楽性のある小説なんておれには書けやしない。……おれはそんなものを書くために苦勞してきやしないんだ。けれどもその雑誌社にはちよいとした

義理みたいなものがあつて、そこにはまたわけもあるんだが。：
：実はそれに金も多少は要るには要るのさ。と云つてみたところ
で些細ささいなものなんでね、そのためにおれが娯楽ものを持つて廻る
理由はない。

——きみとはそこは立場が違うんだ。

——おれとしてはそこまでは品性を下げたくはないんだ。……
うん注いでくれ。

——どうやら少しばかり人間らしくなつてきたね、久しぶりだ
もんだから胃袋のやつ吃驚びっくりしてるんだらう。それほどにはしけ
てるというわけもないんだがね、このところ腎臟じんぞうが悪いような
具合だったのさ。女房のやつが再来さらいげつ月また子を産むし、先月は

先月でいちばん上の娘が入院しちゃってね、そんなごたいそんなものでもなかつたんだが。……おれたち自由主義時代に育つた人間は子供にあまくってだめだ。……きみ、病院なんていつてもこの節はきみどうして馬鹿にはならない。

——本当に知らないかね仲井天青を。そうかなあそんな筈はないと思うんだがなあ。……本当に知らないとすればきみは不幸だ。仲井天青、……おれは涙が出てくる。

——おさない小山内さんが土曜劇場、……だったか自由劇場だったか、いや土曜劇場だったなたし慥か、あれをやっていた当時のことを知ってるだろう、それと対抗して人間劇場というのを主宰していたのが仲井天青さ。詩も書いたらしい、が、シング風的一幕物ではか

なりな評判をとっていた。「いったい誰が馬鹿だ」という一幕物
 なんぞおれは今でも忘れることができない、上演したときは劇団
 が悪かったもんで、ある批評家から「戯作者である」なんという
 下劣なことを書かれ、酔っぱらってそいつの家へ押しかけていつ
 たこともある。……あの頃はみんな純粹だった、金も無いし名も
 ないが、みんな頭には月桂樹げっけいじゆの冠をかぶっていたからね。きみ
 なんぞとは違うんだ、きみなんぞは。……飲め周五郎、くよくよ
 するな。

——おれの頭には学問はない、が、詩が詰っている。天青はよ
 くこう云っていた、右手の指で額をこつこつ叩きながら、こんな
 ふうに眼をすぼめてき、……詩が詰ってる。そしてどこかへめり

こんでしまった。うん、消えちまったのさね、詩のいっぱい詰った頭を持ってさ。……世間には生きてるうちはわいわい騒がれて、死ぬととたんに忘れられちまう人間がある。また生きてるうちは眼立たないで死ぬと急に偉くなる奴もあるさ。……彼はそのどっちでもないがね、と云うことはつまり彼は仲井天青だったわけさ。

——だがおれはその頃はまだ彼を直接には知らなかった。彼の戯曲を読んだり、彼に対する批評やゴシップをみたりした程度らしい、そうして彼の名がジャーナリズムから消えるのといっしょに、おれもすっかり忘れてしまった。……そうだ、すっかりだ、きれいに忘れてしまったものさ。くだらねえ、なんだ。アポロンの琴、ニムフの柔肌やわはだ、肉と酒と踊りだ、ギリシア人が幸福だっ

たのは知的桎梏しつこくから自由だったからさ。いいよ余計なことを云うな、まだ酔いはしない、おれを酔わしてくれようなものはこの世にはない。冗談じゃねえ、おれはなこうみえても。……おれたちはみんな翰林院かんりんいんへはいるよりも養老院で死ぬことを誇りとしたもんだ。おまえなんぞは俗物だ、なっちやいねえぞ、まあ飲め、少しばかり愉快になつてきた。

二

——おれがあのととき東京を逃げだしたわけは云いたくないね。理由を云えばそこにはいろいろ複雑なこともあるが、恋愛問題な

どといつても単純に説明はつかない。……逃げだしたとも云えるし、放逐されたと云えば云えなくもないんだ。それで須磨すまの大村さんの家へころげこんで、ちようど大村さんはオレゴンの支店長になってアメリカへいつていた留守のところさ。それだもんだからおれは留守番のようでもあり、また夫人の護衛役のような立場でもあればあれたんだが、おれとしてもそこまで品性を下げたくはなかった。

「とにかくそこはお互いになんてございますもの、気楽にして遊んでらっしゃいませな」

夫人もこう云ってくれたんだ。

「あたくしもこんな性分なんでございますから、そこはまたなに

かとあれでございますし、本当に自由なお気持で、文学の方面のことなどなさいませよ」

鼻にかかったような声で、片方の手でうしろ髪のところを触りながらこう云ってくれたもんなんだが、おれとしては気楽な気持なんていうわけのものじゃなかった、文学の方面なんぞというよ
うなそんな問題じゃないんだ。……それで神戸夜話社という怪し
げな雑誌社へはいった。怪しげというか、いかがわしいというか、
どっちかといえばやけくそみたような雑誌であり、雑誌社であつ
たものさ。

——その社は元町もとまちどお通りと栄町の電車通りとをつなぐ狭い横丁
の喫茶店の二階にあつた。もちろん古い木造の日本建築で、表に

面した六帖二間をぶつとおして、古畳の上に机と椅子を並べたのが編集室なんだった。窓は関西地方によくあるたてしげ格子が箆はまつていたし、庇ひさしは深く垂れているし、横丁を隔てた向うも同じような二階家で、できるだけ日光や通風を妨害するような仕掛になつてゐるから、暗いのとじめじめする点では苦情を云うところはなかつた。

——九月の二十日あたり入社したんだらう、社長はわりかたおれの立場というものに同情を感じたらしかつた。彼は五尺あるかなしかの小男で、焦茶色にもなり蒼あおぐろ黒くもなる顔色の、骨ばかりのように瘦やせた、そして鼻の下にちよび髭ひげを立てたという風ふうて態たいなんだ。少しばかりは出っ歯だつたかもしれない。……いつ

もちよこまかと出たり入ったりしては、甘ったるいような声でよほど社長めいた口をきいた。

「せやよつてに今月はもうなんやよつてに月給は十月分からきちつとあげまつさ」

こう云つて彼はちよび髭を撫なで、そうしてちよび髭を撫なでながらおれを伴つれていつて、机に向かつてなにか書いている三人の男に紹介してくれたんだ。……こちらが編集局長の田口詩楼はん、こつちやが主筆の仲井語楼はん、これが総務の福地録楼はんというわけさ。おれは語楼はんの部に所属して、随時に編集局と総務部の応援をするという割当だったんだが、くわしいことはいま云いたくない。

——田口詩楼氏は、……おれは敢えて今でも氏と呼ぶことを恥
じない。美しい口髭の、おもながで色の白い美男子であつた。も
のを云うときに唇がちよつとばかり歪ゆがまるんだが、静かなおつと
りした調子で話すのが、いかにもおひとがらで、そんなふうな雑
誌社にいる人間とはみえない。実をいえば、と云つてもおれも聞
いたことなんだが、氏はまえに名古屋新聞のどの部かで部長をし
たこともあり、そのときもじつさいの席は神戸ながし日報の某
部長だつたそうだ。なにかしらちよび髭社長とひっかかりがあつ
て、そんな編集部へも名を貸していたもんならう。……氏は
三日にいちどぐらい来て、二時間ばかりかして帰つてゆかれた。

「——では仲井さんお頼みます」

おっとりとう云つて、片方の手にてかばん手鞆と細身のとう籐のステッキ洋杖を持ち片方の手に黒いベルベットの帽子を持って帰つてゆかれるんだが、その歩きつきがまたひと足ひと足ゆつくりとか噛みしめるようなくあいで、なんともいえず優雅な意味深長なものなんだ。……おれもいつかいちどはあんなくあいに歩いてみたい。

——福地総務はなに者でもなかった。ちよつと表へ出ればそこからいや厭になるほど見られる人間のひとりさ。彼はあらゆる雑用をひきうけて、それをみんなおれにひきわたして、自分はいつも机の上へつつ伏して眠っていた。……机の上に鼻息だかよだれ涎だか知れない水溜りみずたまが出来るくらい熟睡するんだ。が、……彼が社長のスパイだったということはあとでわかつたさ。

——さて仲井語楼なんだが、これには驚いた。初めて社長に紹介されたとき、彼はねじり鉢巻をして椅子の上にあぐらをかいて、その椅子の右側に一升しょうびん壇たんを置いて、そいつを湯呑み茶碗に注いで、ぐいぐい飲みながら原稿を書いていた。……実になんといつたらいいか、要するにそんなふうには編集所にはびつたりし過ぎで却かえつて不自然なくらい傍若無人なようすだった。

「ふん、君も東京の落おちゆうど人か、ふん」

そのとき彼はこう云つてにやつと笑つた。いい顔なんだ、実にいい顔なんだ。ちかごろの里見さとみとん孿たの顔をもう少しばかりしげさせて苦痛と頹たいはい廢はいの薬味を加えればいいかもしれない。彫の深い、眼のぎろりとした、とにかくただものでない顔なんだ。……君も

東京の落人か、ふん。こう云つてにやつと笑つたんだが、そのときのぎろつとした眼とまつ白な歯とをおれは忘れることができない。

三

——おれは須磨の家から毎日その社へ通勤したさ。おまえなんぞは信じないだろうが、おれとすればそういうばあいには精勤なんだ、八時半には毎朝きちんと出社した。こういうことは文学精神とは根本的に違うんだ。……またたびと飾り文字を書いた喫茶店の両開きの扉をあけてはいる。卓子や椅子の並んでいてこぼ

この土間をつき当たるとそこに広い階段がある。おれは靴を下駄箱へ入れてその階段を登ったりおりたりしたわけなんだが。

——階段をあがった廊下の左側、つまり表に面した側に編集室があり、それと対して廊下の右側が社長室になっていた。十帖くらしいの日本間で、昼間のうちは彼はそこで社長事務をとり……たいがいは留守であるが、……夜はそこを寢室に使っていた。夫婦の居間は階下の奥にあつて、妻君はそっちに寝る習慣であるらしい。社長はそれがお互いを尊重する文化的な寝方であり、同時にけんたい倦怠の生ずるのをふせぐ合理的な手段だというふうに自慢していたもんだつた。それは一面では真理であるらしい、その後どこかでおれもそんな記事を読んだことがあるようにも思うんだが、

しかしそれはそれとして、妻君はその方法について全面的には賛成ではなかつたようだった。

——話はやつぱりその点に触れておかなければならないのだが、つまり社長と妻君の関係なんだけれども。……妻君というのは四十二三になる大女で、容積と重量ではあらまし社長の倍くらいはあつた。額のぬけあがつた、とがった頬骨の、口の大きな、眼のぎらぎらした、なんともいやらしい狐のような顔で、人間の貪どんよ欲くと無恥と酷薄をひとつに集約したようないやらしいヒステリー女だった。……彼女はもとわりとすれば中くらいの花柳界にいたということだ。軍曹か曹長あたりの未亡人でもあるらしい。五六年かあるいはもうちよつとまえに現在の喫茶店を開業し、そこ

にはそこにあるような女給を置いてけたたましく儲けたもんだという。……まあかなりな貯金が出来たわけなんだが、そこへちよび髭社長があらわれた。……おれとすればこんな下劣な話はしたくない。が……ちよび髭社長はそのちよび髭と各種の秘密文書とを巧みに活用し、ついに貪欲と無恥と酷薄のかたまりであるそのヒステリイ女をろうらくしたわけさ。

「あなた貴女のような類のない婦人が、こんな低級な営業をしていらつしやるのは自分としては心外に耐えない、実にそれは貴女ご自身にとつても一般社会にとつても軽くない損失であります」
こんなことも云つたもんだらう。

「ひとつ自分と協力して文化的であり高級的であり、しかもぼろ

い事業である所の、雑誌社を経営なすつてはどうでありますか、
そうなればしぎよう斯業経営についての犬馬の労は云うまでもなく、自
分はこの肉にくたい躰も精神もあげて貴女のために忠誠をつくすであり
ましょう」

こういうようなことも云ったんだろう、いや慥かに云ったらし
い証拠には。……ああいやらしい、おれはへどをつきたいみたよ
うな気持になつてきた。おいぐつと注いでくれ。

——まえにも云つたように、おれは八時半には社へ出る。それ
からたつた独りで、うす暗いじめじめした編集室の、脚のがたが
たする椅子に掛け、これもがたがた揺れる机に向うわけなんだが、
そのときのうらさびれた頼りない気持ときたら、なんともかとも。

……だが今ここではなんとも云いようがない。またときにはそこに仲井主筆のいることもあった。主筆は酔いつぶれて自分の家へ帰れなくなるんだ、そこですつかりすり切れたような毛布にくるまつてごろ寝をしているんだが、それだっておれの気持の救いになる道理はないさ。

——とにかく仲井主筆がそこにつぶれていようといなかろうと、おれは暫くはがたがたの椅子に掛けてしぼんだような顔をしているんだらう。すると、……社長室から妙な声が聞えることがある、そのときによっていろいろな声なんだ、一定しているようでありながら一定してないんだ。あるときは明らかに女性の声でいやんというふうなものが聞えたが、それはまちがいなしに鼻の中で

発音された声であつた。……きみ試しに舌を動かさないうで鼻の中だけで云つてみる。いやん、ごく短く「いやん」というんだ。そうかと思うとききつきつというみたような声だの、またそのほかの。……つまり各種の。

——社長室からなんの声も聞えないし物音もしないときがある。するときまつてあのいやらしい妻君が編集室へやつて来るんだ。蒼あおいというか白いというか、灰色じみて硬かたばつたひきつたような顔で、血ちばしつた眼をぎらぎら光らせて、ばらばらな乱れ髪でさ。……寝衣ねまきの裾をだらしなくひきずつて、そうしておれのところへ来て噛かみつきそうな調子できくんだ。

「あんたうちの社長知つてやないか」

上と下の歯がむきだしになって、そいつががちがちと鳴るんだ。白くなつてかさかさに乾いた唇が捲まくれあがつてるんだ。おれとすればそれほど気が弱い方ではないつもりなんだが、それにしても二三度はつばきをのみこまないとすぐには返辞ができなかつた。

——云つてみれば社長はそのときすでにほかに女があつたものさ。寢室を別にしたのも文化的であり同時に倦怠からお互いを防衛する手段である以上に、妻君の眼をのがれてその女のところへ泊りにゆく目的も多分に含まれていたらしい。……そこでおれの立場として実に当惑するようなことが始まつた。と云うのが、あの朝のことなんだが、そして社長室で例の理解しがたい音声の聞えたあとのことなんだが。……そうだ、薄い絹かなんぞをきゅつ

と引裂くような声が三度ばかり聞えて、それから十分ばかり経った頃なんだつたろう、とつぜんその部屋で妻君の叫び声がおこつた。

「いやなら出てゆきなさい、出てゆきなさい、さあ出てゆきなさい」

こういう悲鳴のような叫びなんだ。

「ここはあての家や、あるもんもみんなあての銭で買こうたもんや、あんたのもんはなに一つあれへん、どうさもないこつちや出ていきなはれ、出なはれえな、出てかんかいな」

社長の声は殆んど聞えない、なにか云つてゐることは云つてゐるらしいんだ。ぼそぼそ声はしているんだがなにを云つてゐるかは聞え

なかった。妻君は激烈なヒステリイをおこしたとみえ、むしやぶりについてひつ搔かいたらしい物音がした。

「くやしいーっ、ああくやし、文化的事業のなんぞのとひとをはめやがって、あんな汚ならしい雑誌がなんや、なにがぼろい儲けや、うまいことぬかしくさって、初めからあての貯金ちよろまかす氣いやったんやろ、出てゆけ、そしてあのぬすつと阿魔あまと寝くされえ」

「わいが悪いて、このとおりやこらえてくれえ、このとおりや」
「こんどは社長の声が聞えて来たんだ、——あの女とはもう逢わん、こらえてくれ、このとおりや」

おれは椅子から立って、足音を忍ばせて階段をおりた。すると

階段のいちばん下の段に仲井主筆が腰かけていて、こつちへ振返つてにやつと笑い、それから片手に小さな風呂敷包を抱えたまま立上がつて、

「社長が聞いたら帰つたと云つてくれ」

こう脇のほうを見て云つた。階段のすぐ脇のところ奥へ通ずる板敷がある。そこに花ちやんと云う女中と喫茶部の女給のそえ子が立っていた。かれらもそこで二階の騒ぎを聞いていたものな
んだらう、仲井はおれのほうへ「出よう」と云つて、下駄をつつかけてさっさと外へ出ていった。瘦せた肩の一方をつきあげ、古びた袴はかまの裾をひきずるような恰好で、さつと扉をあけた姿は今でもおれの眼には比較的あざやかに残っている。

——主筆はおれをすぐ近くの居酒屋のような家へ伴れこんだ。

彼はなじみとみえて、まだ掃除もしてない時刻だったが、髪をつくねた色の黒い中年の女が出て来て酒のしたくをしてくれた。

「君とはいつペン悠ゆつくり飲もうと思つていたんだ、今日はひとつ楽しくやろう」

「しかし社のほうはいいんですか」

「ああいう特別演出のあつた日は休みと定きまつてるのさ、今日はあのちよび髭で一日じゆうメドウサのごきげんをとり結ばなくちやならない、われわれがいては却つて邪魔になるんだよ」

そこでおれたちは飲みだしたのさ。主筆はコップであざやかにくつくつと飲む、乱暴なんだが少しも乱暴のようにはみえない。

左手の肱ひじを台について指先で頭を押え、右の肩をおとして少し斜に構えた姿勢なども風格的なんだ。酔いがまわりだすとあのぎろりとした眼が熱を帯びたようになって、いよいよただものでないという感じが強くなった。

「うんそうか、文学をやるのか、よかろう」

「いやそんな、文学なんていう、そんなその」

「てるるなよみつともない、文学なんてそんなにてれるほどたいしたもんじやない、おれは魚屋をやる、おれは八百屋になる、…おんなじこった、てれたり恥ずかしがったりする意味なんかちつともありやしない、さあ、きみの文学のために乾杯しよう」

その家を出て四五軒ばかりはしごをしたもんだらう。おれはか

なり酔つちまっていた、そしてだいぶめそめそやったらしい。な
んでも狭いごたごたした酒場で麦酒ビールを飲んでいたときなんだが、
おれはなにかしきりと主筆に対して非難していた。非難というよ
りはまあおべつかみた様なものさ、仲井さんほどの人がこんな所
に埋もれている法はないどうして貴方はこんなふうとうかいに韜晦とうかいして
いるのであるか。……まあそんなようなことをしかも熱情をこめ
たみたようにならべたてたんだ。すると主筆は少しばかり蒼くな
つてきた顔をあげ、唇のまわりを手でひつこす擦りながら云った。

「君はいつからおれだということを見ぬいていたんだ」

「貴方をですか、……それは、見ぬいたといったって」

「おれが仲井天青だということをさ、いつから見ぬいていたんだ

え」

四

——おれは当惑にうたれた。わけがわからなかった。だって仲井天青などという名まえがなにを意味するか、全然まるつきり見当がつかなかったからだ。……人間が狡猾こうかつにたちまわるといふことは一般的には美德とは云えないんだろう、おれとしても心構えとしてはそう思うんだが。……その時はおれは狡猾にたちまわった、それについては責任を回避しやしない、おれは恥ずかしいと思う。が、結果としてはおれはひそかに一日一善であると今で

も信じているんだ。

「ぼくはうれしい、そうか、きみは覚えていてくれたんだな、そうか、ぼくはうれしい、ぼくもまだそれ程には忘れられてはいないんだな」

仲井主筆はこう云つてぼろぼろと、……本当にぼろぼろと涙をこぼした。その幾粒かがコップの中の飲みかけの麦酒ビールの上へ落ちこむのを眺めながら、おれはますます途方にくれ、さればこそますます狡猾ろうを弄ろうさずにはいられなかつたわけなんだつた。

——その晩は西の場末のほうにある板宿いたやどというところの、ごみごみした裏長屋の、仲井天青の家で泊つた。どこをどうしてそこまで辿たどり着いたものか、……眼をさますと一つの夜具の中で彼

といっしよに寝ていたわけさ。雨戸を閉めなかつたので、障子の
上のところに一尺ばかりの幅で日光がさしている。蠅はえが一匹どう
いうつもりか、しきりにその日の当つているところでこつんこつ
んと障子の紙に躰たいあた当りをくれている。おれは何となくロシヤの
小説のなかに出てくる頭を壁へぶつけて死にたいという言葉を
思いだして、それを思いだした事とは別に関連もないんだが、ぐ
るつと部屋の中を眺めまわしなどした。……独りぐらしの中年の
男の投げやりな部屋というほかには、今とりたててきみに話すよ
うな景色ではない、が、そのうちに壁際はぎにおつけてある机の上の
安い瀬戸物のブック・エンドに挟はさまって、十四五冊のうすつぺら
な雑誌が並んでいるのをみつけた。それが「神戸夜話」でないこ

とは慥かだし、背中に印刷してある活字がどこかで見たことのあるような感じなので、ちよつと手を伸ばして5冊ばかり取つてみたのさ。……それは「新演劇」というひとところちよつと知られた同人演劇雑誌で、おれも読んだことのあるものだったんだ。だがまだなにも気がつくわけはないさ、暢のんき気なつもりで一冊の目次をあけて眺め、放りだして二冊めの目次を眺めた。するとそこに「いったい誰が馬鹿だ」という一幕物の戯曲が載っているのをみつけたんだ。

——おれは少しは酔ってきたらしい。

——このかすとりは大丈夫なんだろうな。メチールのはいつてるやつは臭くつてこっちの精神さえ大丈夫なら本来が飲めたしろ

ものじゃない筈なんだってな。……そうとすればこいつは大丈夫は大丈夫らしい、注いでくれ。

——それから四五日は仲井天青はひしやげた様な顔をしていた。そうして例の一升壇から酒を湯呑み茶碗へ注いで、椅子の上にあぐらをかいてねじり鉢巻をして、がりがりとペンの音をさせながら原稿を書いていた。……それが、これは云いたくはないんだが、原稿といっても実は恥ずかしくて顔の赤らむのを誰だつて拒絶することができやしない。そうじゃないか、……神戸夜話という誌名そのものでわかつてる話さ。親は子に隠し、子は親に隠さなくちや読み得ない、つまりちよび髭社長が文化的ぼろ儲けと見当をつけたところさ。しかしあのいやらしいヒステリー女房にまであ

んな汚ならしい雑誌と罵られののし、たいしてはぼろいこともなさそうなんだが、実は、と云つてもこれもあとで聞いたことだったが、社長はその雑誌をうまく利用して、高価でいんちきな秘密文書を売るとか、または他人の秘事を嗅かぎだして原稿にし、それを種に金品を、……ああおれはまたへどをつきたくなつてきた。

——仲井天青はばりばりがりと猛烈に原稿を書いた。あれから四五日はそんなふうで、おれには口もきかないし顔を見るのもいやだというようなくあいだった。……あの晩おれとあんな風に感動したり、涙をこぼしたりしたことが、恥ずかしかつたものなんだろう、おれとしてもかなりな程度には同じような心持だった、それだもんでこつちもなるべく当らず触らずという態度をと

つていたことはいた。……けれども気持としては、なんと云いようもないんだ。仲井天青、……仲井天青。もちろん彼の才能にどれだけの価値があるかは知らない、そんなことは誰だってわかることじゃないんだ。……げんにも生きてるうちは文学の神様だなんて云われていた人間が、死ぬとたんに先輩や仲のいい友達からまで悪口を云われたじゃないか。……それだってその人間はその人間だったんだ、それだけは少しも変りはないんだ。……天青だってひところは中央の文壇で作品を認められ、小さいながら劇団を主宰したこともある。価値のいかんは別として仲井天青は仲井天青であったんだ。……それがきみ、それが、……そんな土地へめり込んで、うす暗いじめじめしたごみ溜ためのような編集室の隅で、

椅子の上にあぐらをかいて、ねじり鉢巻で、茶碗酒を呷りながら、
ばりばりがりがりとペンの音をさせながら、そんなような思わず
顔の赤らむような原稿を書いているんだ。……おれは泣きあしな
い、ひとをばかにするな、これはそんなめそめそ泣くようなそん
な軽薄なもんじゃないんだ。

——福地総務はうつ伏しになって、机の上へ水溜りを拵えなが
ら眠っていたのさ。

——田口氏は三日にいちどぐらいつつ来て、なにかかにかして、
では仲井さんお頼みますと云つて、片手に手鞆と洋杖、ステッキ片手
に黒いベルベットの帽子を持って、おつとりと一步一步おひとが
らに帰っていった。

——おれがなにをしたかということとはひと言では云えない。ただ原稿を書くこと以外は、……なぜつてさいわいおれにはまだそんな様なものを書く手腕も見識もなかったから、……それだけはしなかったがそれ以外のすべてのことをやったわけだろうさ。

——おれは印刷工場へも使いをした。その工場は阪急線の石屋川というところにあつたんだが、そこへゆくと幾たびかしら近くの飯屋でひるめしを喰^たべた。なんとも云いようのない喰^たべ物だった、おまけに窓から向うに六^{ろっこう}甲の山がみえる、まるで真空のよう^{まだ}に空気が澄んでいるからなんだろう、山の白茶けた岩肌やところ斑^{まだ}らな松林なんぞが、眼に痛いくらい鮮明にみえるには弱った。秋、というと突然みたようだが、そんなふうな悟つたような澄明

な秋の山なんぞというものは、そのときのおれの立場としては共鳴するわけにはいかなかったんだ。おれは今だってそんな秋の山なんぞは見たくない。

「ひとつ、今夜いっぱい、やるか」

ある日の帰りがけに、がまんを切らしたというような顔つきで仲井天青がそう云った。子供が親になにかねだるときのような、こつちの顔色をうかがうような、顔色だった。

「ぼくは今日は小遣を持っていないんですが」

「なにぼくだって持ってやしないが、勘定のきくところがあるから大丈夫さ、その点はぼくが、これさ」

天青はこう云って右の手で胃袋のあたりを押ししてみた。……

そしてあれ以来はじめて二人はその晩いつしよに飲んだんだが、その晩のことだけを切離して紹介するわけにはいかない。

「ブルウタスよ、おん身もか」

こんなふうな気取ったようなせりふを彼は云うてみせたものだったが、それだって一度きりのことではなし、その後は殆んど毎晩のようにつながっては飲んだもんなんぞで、……彼はいつかしろおれにも勘定のきく家を拵えてくれた。

「文壇の大家だといったってなんだ、いったい谷崎潤一郎がなにものなんだ、笑わせるな、おれは日本の文壇なんぞ相手にしているんじゃないぞ、エケホモ、おれはこうみえても仲井天青だ」

天青はぎらぎらと熱っぽく眼を光らせ、右とか左とかどつちか側の肩をつきあげながらこう云うんだつた。意氣軒昂けんこう、不屈ふ不撓とう、孤岩屹立きつりつ、多少めちやくちやな感じかもしれないがおれとしても無関心ではいられなかつたさ。

「おれは敗北した、それは認める、しかし、敗北にこそ眞実のあつるといふことを知っている者があるか、云つてみる、われわれの文学精神は破滅を信ずるところに立脚しているんだ、氣をつけろ、おれが敗北したままじつとしていると思つたら大まちがいだぞ」

それから天青はまたよく歌をうたつた。

常春藤きづたの冠をあみだにかぶり

バツカスおまえはファウンのお供

こういったようなわけの知れないものだの、わざと卑しい低級な流行歌だの、そのほか各種の歌だった。そしてあんまりやかましくって周囲の客たちに悪いと思つて、おれがちよつと注意したりすると必ず奇怪な身ぶりをして、ブルウタスよおん身もかといひ氣持そうに云うわけだった。

——こんなことをいうと拵えたように思うかもしれないが、仲井天青のようすがしだいに風格を帯びてきたと云つてもおれは良心に恥じない。彼はめきめき彼らしくなつていった、熟すべきものが彼の内部において熟し始めたんだらう。彼は彼自身をとりもどしたばかりでなく、今やとりもどした彼自身の上へよじ登らうとさえするように思われた。

「ぼくには学問はない」天青はこう云って右手の指先で額をこつこつと叩き、ごく秘密なことをうちあけるかのようににやつと笑いなながら低い囁き声ささやでこう云うのであった。「——が、この中には詩が詰っている」

彼はしきりに文芸雑誌の創刊をもくろみだした。そろそろカム・バックしても早すぎはしないと云った。彼には……その頭腦の中には……幾つかの大きな長篇小説と幾十篇かの戯曲の構想がすでに完結しているのであった。

「やろう、きみ。おれもライフ・ワークを始める時期には時期なのさ、為なすべきものを持っていて為さないのは罪悪だ、われらの旗を掲げよう」

五

——これらのあいだにおれは彼について多くのことを知った。
仲井天青はジャーナリズムから消えて以来、浅草のなにがし座で
文芸部長をやったり、他の劇団のレパートリー顧問になったり、
また喜劇一座と旅まわりもしたものらしい。……その頃に細君と
は別れて、浅草のなに太郎とかいう名妓めいぎに恋され、その名妓は彼
のために身ぬけとかいう冒険を敢えてして結婚し、旅まわりなど
にもいっしょに付いてまわったのであるが、現在、彼女は元の土
地の浅草で、ある格式の高い待合茶屋の女中がしらをしながら、

彼の呼びよせるのを待っているということだった。

「だがぼくは彼女を呼びよせる気はない、ぼくは今そんな安楽なことなんぞ考えちゃいないんだ」

天青はおれになんどもそう確言した。

「ぼくの野心はそんなちっぽけなものじゃないさ、この野心のためには汚濁と絶望と貧困を耐えしので来たんだ、ぼくは人情的であるわけにはいかない、彼女は彼女として、……ぼくは雑誌の題を人間芸術ときめようと思う」

おれはひどく酔うとたびたび天青の家へ泊ったもんだった。電車がなくなつて、兵庫辺りから夜更けの道を歩いていったことも珍しくはなかつた。その途中に家並がとぎれて空地つづきになつ

たところがある、右も左も荒れた草原で、いかにも場末らしくやたらに紙屑かみくずだの空罐あきかんだのの塵芥じんかいが汚けならしく捨ててあるんだ。とうてい浮いた気持になれる景色じゃないんだが、そこへもつてきてコスモスがずらつと咲いていた。横さまにみんな倒れている、倒れたまま咲いているのや倒れたところから起き上がって咲いているのや、実にしだらもない乱離たるありさまなんだが、こいつが道に沿ってどこまでも咲いているには降参した。……こっちは酔い痺しびれてうらがなくなつて、だからこそつけ元気でやけくそな歌をうたつたり傲慢ごうまんなことを喚こゑいたりしているんだ。それこそ破滅的な気分ではいるところなんじゃないか、そこへ星あかりの暗がりからぼうつとほの白くコスモスの花がみえてくる。

……捨てちらしてある塵芥、紙屑、そしてほの白くしんと、どこまでも続いて咲いているコスモス。……花には特別の罪はないのかもしれないがおれはこいつだけにはどうしたってシャツポを脱がずにはいられない。

——天青はだんだん深酔いをするようになっていった。

——おれの初めての月給、つまり十月分の月給は一枚の計算書だった。袋の中にはほかになにも入ってはいなかった、そうしてその計算書のいちばん下には赤い字でそくばくの金額が書いてあったものさ。……これを要するに飲屋と弁当屋が勘定を取っていたんだが、その結果として赤い数字だけおれの月給からはみ出たというわけなんだ。おれとしては失望でもあり不満なような気

持だったが、よく世間で云う赤字なになにというのはこのことなんだと知って、少しは教訓も得たような感じだったと思う。

——天青はその点もつと状態がいけなかつたらしい。会計……といつても社長の妻君なんだが……は飲屋その他の彼の勘定をみんな拒絶した、つまるところ天青にはそれらの勘定を支払うべき余り分がないばかりか、さらに多額の前借があつて、会計としてはもはやそれらに対する責任を負えないというんだつた。……しぜん飲屋その他の勘定取りは編集室へやって来た。そこでそういう際に多くの人々がする通り、彼もまた五日ばかりは社を休んで姿をみせなかつた。

——おれはどうしたつてもういちどは社長とその妻君のことを

云わずにはいられない。

——あの特別演出のあつた日から半月くらいは静穩な時が経過したろう。おれは精勤であることだけは守つたから依然として八時半には出社したが、しばしば社長室からあの稀有けうな声音のもれるのを聞いた。おれはまだおれの年齢としては無知であつたが、それでもその声音ないし音声がかれら夫妻の平和状態を示すのだということだけは察しがつくようになっていた。……云つてみれば、社長はそのちよび髭と秘密文書による蘊うんちく蓄をもつぱら妻君に提供したものだろう。が、社長には社長でまたそこに計画があつたものさ。これもまたあとからわかつたことなんだが、彼は次期の市会議員選挙にうって出るという野心をもちはじめていた。

それでこれに要する事前運動のための軍資金を、その貧欲酷薄な妻君からひきだそうと計ったわけらしい。……それについては彼は自分のちよび髭と秘密な蘊蓄ぼくだいとに莫大ぼくだいな自信をもっていた、ことにその妻君の嗜好しこうに関しては何の隅まで熟知していたから、その効果にはかなりな程度まで安心していたふうだった。

——人間がいつも自分自身によつて欺かれ自分自身によつて失策するということは悲しいことだと思ふ。社長は自分の技倆ぎりょうを些いささかも疑わなかった、そこには確信さえもっていた。にもかかわらずしくじった。かの貪欲なヒステリー女は社長の奉仕を専有することには少しも躊躇ちゆうちよしなかつたが、彼の申し出に対してはあたまからせせら笑い、彼の鼻の前でぴしやりと戸を閉めた。

「あほらしい、あてが金持つてるとでも思ってたんかいな、冗談やあれへん、集金があんじよう集まらな今月はやってゆかれしまへんで、あほらしい、しっかりしとくなはれ」

こう宣告するのをおれはこの耳で聞いたんだが、その仮借のないせせら笑いにはまいった。おれにはなにも直接の関係はないんだが、それでもなんとなく世の中がならし平べったくなるような、たより薄い淋しさを感じずにはいられなかつたものだった。

——十一月になってからだだったが、社長は売れ残って返されて来た雑誌を、社会事業のためにといって市庁のその部へ寄付した。これは次期市議選挙に対する予備工作のひとつだったんだらう、せいぜい三千部ばかりの古雑誌だったが、これを妻君とのひとつ悶も

んちやく

着を恐れて、彼女には知らせずに寄付したものさ。……おれは社長から特に頼まれて取次店の倉庫から市庁舎までの運搬のつだいをした。

「なあきみ、奥さんには内証やで」

社長はそのときおれを外へ伴れだして、たぶん籠絡ろうらくするつもりだったんだろう、近くの横丁にある屋台の珈琲店コーヒーてんでコーヒーを二杯おごってくれた。

「きみもサラリが少のうて済まんけど、まあもうちつとのま辛抱してえや、わいもいつまでこんなやくたいもないことしていやへん、いずれ近いうちに、……まそれは云わん、今はまだ云わんけどやね、きみの将来はわいが承知したるね、いまにきつときみに

もひと花咲かしたるよつて……」

だがそこでもまた社長は足をすくわれた。市のほうでは寄付を受けたものの雑誌の内容には注意しなかつたらしい、古雑誌ならまあ、養老院とか孤児院とかいった関係へ配ればいい位の感じだつたらしいんだ。ところが受取つた現物をみて狼^{ろうばい}狽^{ばい}したさ、親は子に隠し子は親に隠さなくては読めない雑誌なんだ、市当局という立場としてはどうてい関係方面へ配れるわけのもんじゃない。いろいろ会議があつたものか、それともそんなものなしだつたか想像外のことだが、一週間ばかりすると社へ小使が来て、そのよくな雑誌の寄付は受付けるわけにいかない旨を述べ、なお即刻こちらへ引取るようにと云つて歸つた。……そのとき社長が留守だ

つたんで妻君が用件を聞いたということとは現実の悲哀じゃないか。そして直ちに、正確に云うとその翌朝、おれが社へ出たときすでに……おい注いでくれ。

——おれが階段を登って編集室へはいったとき、社長室では妻君の罵り声ののしが聞えていた。それはあの灰色の唇が捲れあがり、剥きだしになった上と下の歯ががちがちと鳴る形相を眼の前に見るような声であった。おれはぞつと総毛だった。これは特別演出に属するだろうかどうか、もしそうなら退散すべきなんだがと、椅子に片手を掛けたまま迷っていると、

「いやいやいやいや出ていけっ」

こういう叫びに続いてどたんばたんぴしやぴしやという物音が

起こった。

——おれは幾らか微笑したかもしれない、かなりの痛快な気分を感じたことは白状してもいい。ちよび髭社長といつても男は男であるんだ、そこはやつぱり女とは違うんだ。こう思っていたんだが、……そう思う間もなく襖ふすまをあけて社長がとびだして来た、額と頬ぺたにひつ掻かき傷が幾いくすじ条もでき、そこから血が出ているのをおれは見た。彼は寝衣ねまきの帯ひろ裸で、廊下へとびだすなりその廊下へ坐つて両手をついた。

「悪かった、堪忍して、このとおりや」

こう云つて彼はその頭をむやみに上げ下げした。その運動の速さと回数については誇張と思われる危険があるから云うのはよそ

う、しかし妻君はきききと叫び、社長にとびかかり、髪をひき^{むし}り、頭や頬ぺたをぴしやぴしや平手で撲り^{なぐ}、そして劈く^{つんざ}ような声で叫びたてた。

「あての金もどせ、どあほ、ぬすとう、ええくやし、あんな小使なんぞに恥かかされて、なにが高級的や、金もどして出ていけ、ぬすとう、ええどうしたろ」

「済まん堪忍して、わいが悪かった、これからあんじようするよつてな、これや」

おれは慥然^{ぶぜん}と浮かない気分になった。多少は痛快だなどと思つた早計を自分で嗤^{わら}い、かれらの脇をすりぬけるようにして階段をおりた。……そこにはいつかのように仲井天青がおり、女中の花

ちやんと喫茶部のそえ子が立っていた。

「出ましよう仲井さん、また特別演出ですよ」

おれはこう云つて自分の醜いざまを立聞きされた者かなんそのように、靴をつっかけざま外へと逃げだしたものだ。

六

——もちろんその日は社を休んで飲んだ。天青はどうにか都合をつけたとみえて、どこの飲屋でも断わられるようなことはなく、ある程度までは従前どおり飲ませてくれた。

「あのちよび髭を嗤わらつてはいかんぜ、彼はきみ彼であつて彼だけ

のものはあるんだ」

天青はその夜しきりに社長を弁護した。

「人間があそこまで裸になるということは俳諧的はいかいてき心境ではないんだ、きみは廊下にへいつく這はった彼の姿から眼をそむけたが、あの姿に人間ぜんたいの原罪を感じることができなければとうてい文学をやる資格なんぞありやしないぜ」

「ああ男は哀しい、男は救われることがない」

天青はこうも云ったさ。

「ちよび髭は初めにあの鬼女をたらしこんだ、彼はあの鬼女を雁が字んじ搦がらめにし、絞れるだけ絞った、彼自身そう思ったし、まわりの者もそう認めた、ところがまったく逆だったんだ、雁字搦みに

縛られたのは彼自身なんだ、絞るだけ絞られているのも彼自身なんだ、……あの鬼女の貯金帳はいま元の十倍以上にもなってる、おまけに、あいつは近いうち花隈はなぐまへ酒場を出すそうだが、それを知っているのは今のところこの天青ひとりだろう、……社長はなんにも知らない、彼は今すつからかんだ、不動産や貯金はもとより誌名登録まであの女の名儀になってる、……剥むかれたのは彼のほうさ、彼のほうがちよろまかされたんだ、あの下賤げせんな狐づらの女悪魔め、……だがきみ、なあきみ」

天青は両手でおれの肩へ凭もたれかかった。

「これはあのちよび髭だけじゃないんだぜ、多かれ少なかれ男はみんな同じなんだ、昔も、今も、これからもさ、……男はみんな

女どもによつて燔祭はんさいにあげられる小羊なんだぜ」

おれは空腹のときみたように下腹からすつと力がぬけてゆくのを感じたと思う。やるせないじゃないか、きみ、……なんというからくりだ、もしこの世がそんなに手のこんだものだとするなら、いつそ海へでもとびこんだほうがいいようにも思われる。……おれはげつそりした。けれどもそれで酔いがさめるといふほどごたごたいそうなわけでもなかったんだが。

——おれたちはまた毎晩のようにつながつて飲みだした。知れたことさ。いやそうばかりでもない、天青は倍くらい元気になった、金もなかなか持っているらしい、勘定で飲めるところは勘定で飲んだが、これまではいったことのない鉄ちり屋だのかんとうだき関東煮

などの赤い おおぢようちん 大提灯のぶら下がった家などへもはいり、そこでは金を出してちゃんと支払いをした。……おれは訝いぶかしいというよりも心配になってきた、だってそんな筈があるうようには思えない、どうかするとこれには不愉快な結果がともなうことになるかもしれない。おれは云ってみた。

「こんなぐあいによつていて大丈夫ですか仲井さん、あんまりなにしてまた……」

「びいさいれんす、きみはまだそんなちつぽけなことを心配しているのか、きみには仲井天青がそのくらいにしきやみえないのか、……その小賢こざかしい口を閉めろ、そして飲みたまえ、ぼくはぼくの野心のいかなるものかを知っている、計画もみとおしもついでい

る、きみはきみを信じなければいかん、飲みたまえ」

彼は文壇の流行作家をひと舐なめに嘲ちやうろう弄する、劇壇の大家には憐あわれみの冷笑をあびせる。詩について、また画について彫刻について、ありとある日本の芸術分野にわたって容赦のない舌ぜつとう刀をあびせる。

「額をあげたまえ、きみ、眼には見えないがわれわれの頭には月桂樹の冠が巻かさっているんだ、かれらなものぞ、われらの時代が近づきつつあるじゃないか、それはもうそこにあるじゃないか、えい、……こう手を伸ばせばそれはわれらのものだ、旗を掲げよう」

彼はおれをいちどは福原の妓楼ぎろうへも伴れていったくらいなんだ。

そして彼は幾らか肥えた、したがってぎろりとしたところが地均じならしをされて少しはだらしくなったようだったが、おれとすれば頼もしいようにも感じたのはしかたがないさ。

——仲井天青は昼間は原稿を書いた。……そして、社長はこんども妻君とうまく和睦わぼくしたらしかった。

——夕方になるとおれたちは飲みまわった。元町あたりから西の方角へはしごをやって兵庫あたりできりあげるんだが、これは万一のばあい板宿まで歩いて帰るのに備えたわけなんだった。

「のうめのめ、のうめのめ世界のまあるほうど、ああ愉快だ、きみ握手をしよう、われわれは生きるんだ、いいか、生きるんだ、生きるんだぞきみ、さあ進軍だ」

天青は情熱に燃えたわけなんだ。うす汚ない小さな酒場の隅で、土間を下駄で踏みにじり、おしろい白粉の剥はげたようなぶくぶくに肥った女給の首を抱き、ふいになにわふし浪花節でオセローのせりふを喚きだし、ぐいぐいとビール麦酒を喉のどへながしこんだ。

「諸君、脱帽したまえ、ここにぼくがいる、ぼくが仲井天青だ」
そして女給の頬ぺたへ吸いつき椅子ごとぶつ倒れてへどをついた。……冷静にみれば、多少は興きぎめでなくはない、おれにしたつてそこまでは断言しない。が、ともかくも天青は燃えていたんだ。

——なにを云うか、それが狂態だといって誰に啗くう権利があるか、人間が純粹になればなるだけ、俗人どもには滑稽こみえるだ

ろう、それがなんだ、天青は燃えていたんだぞ、名声や利欲のためじゃない、なんのためというわけじゃない、彼は芸術への情熱に全身を燃やらかしていたんだ。なにを云うか、さあ云え、いたいきみたちに彼以上のなにがあるか。……人間には平和や家庭や健康で優秀な妻子や、きちんと貰える月給のほかにも大切なものがあるんだ、そのために身を削るほど苦しんでいる者だっているんだぞ、ばかにするな。

——十一月の月給日のことだった。

——神戸という土地は摩耶山まやさんおろしとかいって冬のはじめから凛りんかん寒な風が吹く。おれが厄介になつていた大村さんの家は須磨の離宮山の下で、南向きの日当りのいい環境だから暖かいが、市

内では十一月末となると、朝晩の寒さには誰しもかなわないと云った。

——月給日のことだった。これだけは云わずにはおれないんだが、おれは社長からあつさり馘くびだと宣告されて、ある程度まで失望と驚きにうたれずにはおれなかった。

「きみにも不満はあるかしらんけど、こつちやにも云いたいことはあるねんけど、わいはよう云わんとくさかい、きみもおとなしく引取つとくなはれ」

「おかしいですね、それはどういう意味ですか」

おれとすればかなり馘にはなりたくない気持だった。社長はなにか誤解しているらしい口ぶりだもんだから、誤解がとけて首が

つながるものならと考えたわけなんだ。……だが、ちよび髭はついと月給袋をつき出し、一種の中途はんぱな表情でにやにや笑つた。

「もうええわいや、もうなにも云うことあれへん、だが口は禍いのもとちゆことがあるよつてな、これからは氣いつけなはれや」

まるで不正乗車をして伴れて来られた乗客に対するどこかの私鉄の駅長みたような口ぶりであつた。彼は初めから終りまでおれを見ようとしなかつた。焦茶色のようでもあり蒼黒あおくろいようでもある瘦やせた顔や思わせぶりなちよび髭も、ちつぽけなちよこまかした軀からだつきも、なにもかも急にいやらしく狡猾にみえ、おれは鹹あまになつた落胆もあろうが、むかむか肚はらが立って乱暴なことを云う

かするかしたくなつてきた。……コーヒーぐらいおごつたつて大きな顔をするな、そんなぐらいの気持じやなかつたんだ。が、おれは彼を軽蔑^{けいべつ}すべき人間であると自分をなだめて、わりとしては平静に編集室へひきあげた。

——おれがおれの所有物を片付け終つたとき、廊下をこつちへ来る人の足音がした。すると社長が仲井はんと呼び止めた、つまり仲井天青なんだつた。……たぶん月給を貰うんだろう。おれは椅子に掛けて、幾らか悲観めいた気分になりながら待つていたんだが、とにかく天青には訳を話さなければならぬと思つた。……彼はなかなか来なかつた。低い声でしきりになにかぼそぼそ云つてゐるらしいんだ。なかなか済みやしないさ、……おれは廊下

のところまで立っていつてみた。

——仲井天青は社長の前にかしこまっていた。両手を膝ひざへついて頭を垂れていた。そしてその頭を下方へさげてはおじぎをし、またおじぎをしては懇篤な調子で云っていた。

「月給だつて減らしてもいいんです。酒を節することは断じて約束します、なんだつたら禁酒しようかと思つていました、じつさいこれでは自分ながらあいそがつかますから」

「そらあなたの好きにしなければ、こつちやはいんで貰いさえしたら酒を飲もうと飲むまいと知つたこつちやあれへん」

ああなんと、天青も鹹になつたんだ。

「ぼくは雑誌を今の倍くらい売れるプランを持っているんですが、

ぼくはもつと書きます、雑誌一冊ぜんぶぼくが書いてもいいんです、いま面白い記事があるんで、こいつはあつと読者にうけることまちがいなしですが、……社長、お願いです、お願いします、どうかもう少し面倒をみてやって下さい、お願いします」

ああいたましいおれは胸が潰れる。天青はその頭を下方へさげておじぎをしているじゃないか、雑誌を一冊分ぜんぶひとりで書くとまで壮烈な気持になつてるじゃないか。おれはなにものかに対して怒りたく思った。

七

「もうやめときなはれ、ほして今日のうち引取って貰わなあきまへんで」

「待つて下さい社長、もうひと言、ぼくはこれまで御厄介になつた恩義からしても、このままお別れするには忍びない気持です、まだ御恩返しもしてはいませんですし、社長、お願いします、このとおり」

それ以上おれとしては眺めている訳にはいかなかつた。おれはそつちへいった。そして仲井さんいきましようと言いながら彼の腕を掴んで立たせようとした。すると社長はにやにやと笑いながらこう云つた。

「礼が少のうてお気の毒やなあ」

その言葉と一種のにやにや笑いとがおれを唆しかけたんだ。おれは自分でも吃驚びっくりしたんだが、かつとのぼせたみたようになつて、

「礼はこつちからくれてやる」こう云つてちよび髭の頬ぺたをいやというほどはり倒してやった。……おれとしては今でも悪くないせりふだったと思うがどうだろうか。そういうばあい尋常なことではなかなか思うようなせりふは出ないものさ。しかし、すると天青がはね起きた。おれのはり倒す音がこんどは彼を唆しかけたんだらう、いきなり社長にとびかかり、押し倒して馬乗りになつた。

「この野郎、なんだ、なんだ、この野郎」

吃り吃りどもこう喚きながら、彼は上からむやみに社長の胸をこづいた。昂奮こうふんしすぎてしまつて氣の利いたような罵詈ばりも出ず、撲りつけるという考えもうかばないのらしい。ところで、そこへ、……あの貪欲どんよくと無恥と酷薄のかたまりであるヒステリイ女の妻君が、ひきつったような灰青い顔でとんで来た。知れたこと、唇が捲れあがつて齒が剥きだしになつていた。彼女は天青の脊中せなかへひいとかじりついた。

「なにさらす、このばらけつめ、ぬすとう」

彼女はかなきり声で叫びたてたき。

「誰ぞ来てえ、ぬすとうやぬすとうや、誰ぞ来てえ、
 巡查呼んでえ」

おれは彼女をつきとばした。これはうかうかしては損害になるように思えたんだ。おれはヒステリイ女の妻君をつきとばし、天青を社長から^{むし}り取った、妻君がまた立って来たからまたつきとばした。社長をもつきとばしたかもしれない。……おれとしては大活躍なんだ。それからおれは畳の上にあつた天青の月給袋を拾い、天青をひきずるようにして、まあそのほかいろいろしたさ。そうしておれは靴を持ち天青は下駄を持って外へとびだしたんだが。……あのいやらしい妻君のぬすとうやぬすとうやという喚き声が、いつまでもうしろから追っかけて来るような気分には弱らされた。——おれたちは汽車道まで走りどおしに走った。それから誰も追っかけて来る人間のないことを慥^{たし}かめてひとまずその

道みちばた傍にある材木のようなものに腰をおろした。二人としては顔を見合せたんだが、天青ははあはあ息をきりながら、

「はあ、はあ、きみ、やったなあ」こう云ったもんだった。

「やりましたねえ」

「やったなあ。きみ、やったなあ」

それから彼はけらけら笑いだした。おれも笑いはしたようだが、彼は笑いが止らないくらいで、しまいには拳げんこつ骨で腹を押え、涙をぼろぼろこぼしたくらい笑った。そうしてやがておちつくと、手の甲で涙を拭きながらまじめな口ぶりになって云いだした。

「結局はこのほうがいいんだよ、きみ、人間はふんぎりをつける時が大切だ、ふんぎるんだよきみ、あんな穢けがらわしい腐った空気

の中にいてはこつちまで墮落してしまう、……このほうがよかつたんだ、寧ろ祝むしうべきなんだ」天青はそこでちよつと眼をすぼめたが、矢庭に立上がつて拳こぶしを前方へ出しながら叫んだ。

「飲もうきみ、こんな汚ならしい金は一銭も残らず遣い捨ててやるんだ」

「飲みましょう、仲井さんの新しい出発を祝いましょう」

おれたちは飲みまわつた。といったところでおれの月給はいろいろな勘定を差引かれているからたいしてはない、天青のも件くだんの如ごとしというくらいだつたんだろうさ。だから始めのうちはできるだけ勘定で飲んだもんだが、それでも単なるやけ飲みというだけではなかつた、酔うにしたがつてそこは精神は昂揚した。

——兵庫の「安楽」という小さな酒場を逐おい出されたのが最後だった。午前二時に近いような時間だったと思うが。

——思う存分に飲んだわけさ。

——おれたちは星あかりの暗い道を歩いていて、ときどき歌もうたった。天青はよろけてばかりいた。二度ばかりへどをついたように思う……おれは彼を抱くようにして、彼といっしょによろけよろけ歩いた。おそろしく寒い風がうしろから吹きつけてきた。電線がひゆうひゆう鳴りアスファルトの道の上を紙屑がころげて来て、そうしておれたちを追い越して、向うのほうまでころげていったりした。

八

「きみちよつと、ちよつと休ませてくれ」

天青はこう云つて、もう家がまぢかになつたところで立寄り、道の脇の枯草の上へ腰をおろしてしまった。

「もうすぐですよ仲井さん、そこがもう四つ角ですよ」

「いやだめだ、帰れない」天青はぐらつと頭を垂れて呻うめいた。

「ぼくが負つてつてあげましょう、こんなところでなにしているは風邪をひきますから、ねえ仲井さん立つて下さい」

「きみは構わずいつてくれたまえ、ぼくは帰れないんだ、家へは帰れないんだよ、きみ」

「どうしてです、なぜ帰れないんですか」

「——女房が来ている筈なんだよ」

「——奥さんがですって」

「そうなんだ、あれが来ている筈なんだよ」

おれは天青が酔っぱらってうわごとを云っているのかとも思った。だが彼はぐっぐつと喉で妙な音をさせ、どうやら泣きだしたようなくあいだった。

「社長のやつ、ぼくに、今月から月給を二割増してくれろと云ったんだ、あいつのために秘密出版の原稿も書いたし、その金は貰って飲んだけれども、ぼくは信用したんだ、……それだけあれば生活ができるどうやら夫婦で食うくらいは食ってゆける、……そ

れで女房を呼んだわけなんだ」

しきりに風がわたり、すると波の寄せるように、枯草が遠くのほうからさあさあそこつちへ鳴り騒いで来て、二人のまわりを向うの暗がりへと鳴り騒いでいった。

「女房にはずいぶん苦労や心配をさせて来た、こんどこそ二人で世帯しよたいをもち、幾らか楽をさせてやれる、……そう思つて手紙を出した、女房はよろこんだ手紙をくれた、そして今月いっぱい暇をとることにして、蒲団やなにかは二三日まえに着いたんだが、……今朝あれから電報があつて、今夜の九時に神戸へ着くといつて来たんだよ」

「それじゃあぼくたちが飲んでいたじぶん」

「そうなんだ、ぼくたちが飲んでいたじぶんあれは神戸へ着いたんだ……誰も迎えに出ていやしない、独りぼっちで、初めての土地なんだ……あれは自分で荷物を持って、ところ番地をたよりに、こんな寒い夜道を……」

彼はまた喉をぐつと詰らせた。それから暫く頭をぐらぐらさせ、手を振りまわし、苦しそうに身を揉もんだ。

「君はさつきぼくが社長の前にへいつく這つて、くどくど憐れみを乞っているのを見たろう、そしてたぶん軽蔑したことだろう、……しかしおれは、もし社長がそうしろと云えば、犬のようにちんちんでもおまわりでもなんでもしたと思う、……おれは鹹になりたくはなかった、なんとしても勤めていたかったんだよ」

なにを云うことができよう、おれは慥然ぶぜんとしたような感じで、多少当惑もした感じで漫然と腕組みをしていた。

「ぼくはきみに対しても恥ずかしい、冷汗が出てならない」

「――」

「芸術だとか野心だとか、ひとの作品を罵倒ばとうし、ひとを嘲りあざけ、笑いとばし、われらの時代だの旗を掲げようだの……嘘つぱちだ、ぼく自身がよく知っている、何もかもでたらめの嘘つぱちだ、ぼくはぼくの才能によつて墜おちるところへ墜ちて来たのさ……許してくれたまえきみ、ぼくはいつも恥じていたんだ、ぼくはこれだけの人間なんだよ」

おれとしては慰めようがないわけなんだ。けれどもそれ以上は

聞いているには耐えられないさ。おれは彼を抱き起こした、まあともかくもと云うよりほかにかくべつの思案もなかつたもんだらう。……おれは彼を彼の家のある路次口まで送っていった。そして路次の中を覗いてのぞみないわけにはいかなかつたんだが、云つてみれば厭いやな氣持なんだが、そうするとまつ暗になつた長屋のある一軒だけ、障子に明るく電燈の光のさしている窓が見えた。……おれにはそこから見えるようなくあいなんだ、裸電燈の下にひとりの中年の女が坐っている、側になにかの風呂敷包かなんか置いて、疲れたような顔をして、じつと坐っているひとりの女の姿がさ……。

「きみはこれを機会に東京へ帰ってくれたまえ、そして、しつか

りやってくれたまえ」

天青は別れるときおれの手をぐつと握った。

「決して安きについたり投げた気持になつちやいけない、どつちにしたつて人生は苦しいもんだ、苦しむんなら自分のほんもので苦しむべきなんだよ、……じゃあさよなら、さよなら、頼むからぼくのこととは忘れてくれたまえ」

そしておれは天青と別れたわけさ。

——仲井天青が死んだことは一週間ばかりまえわかった。あのおひとがらな田口詩楼氏から手紙で知らせて来てくれたんだが、……なんだ、もうかすとりもおしまいか、ちえつ。……おれとしては周五郎のごちになんぞなる気持はないんだ。人生はどつちに

しても苦しい、苦しむなら自分のほんもので、……天青としては
きざな教訓みたようなことを云つちまつたものさ。

——ところで十八枚くらいのライトモチイブの娯楽性のある小
説の種はないかね。女房のお産もお産なんだが、それはそれとし
て、まあそれもあるが、……ちえつ、もう酒もなしか。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二十二巻 契りきぬ・落ち梅記」新潮社

1983（昭和58）年4月25日発行

初出：「苦楽」苦楽社

1949（昭和24）年8月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

陽気な客

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>